

第2回 Digital Innovation Grand prix データビジネス創造コンテスト

2014年11月8日(土) 慶應義塾大学SFC研究所
ビジネスパートナー: アクセンチュア株式会社

全国から50チームを超える応募、予選通過の10チームがプレゼンテーション
慶應義塾大学三田キャンパスにて11月8日(土)に開催



森川先生 工藤先生 須江先生 長尾先生 丸山先生 奥村先生 渡辺先生 堀本先生 山下先生 草野先生 村井先生

平成26年11月8日(土)午後、慶應義塾大学三田キャンパスにて、慶應義塾大学SFC研究所のデータビジネス創造・ラボが主催、アクセンチュア株式会社をビジネスパートナーとなり、「第2回データビジネス創造コンテスト」が開催されました。

このコンテストは、大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 統計数理研究所の文部科学省委託事業「データサイエンティスト育成ネットワークの形成」プログラムが共催し、アクセンチュア株式会社、株式会社ブレインパッド、S A S Institute Japan 株式会社、株式会社電通、東京海上日動火災保険株式会社、日経ビッグデータラボが協力、独立行政法人科学技術振興機構、情報処理学会情報処理教育委員会、日本統計学会、応用統計学会、データサイエンティスト協会の後援です。

ビックデータ時代を迎え、データを活用し未来を創造するデータサイエンティストの人材育成が活発になっており、実際にデータを分析し、新たな知の抽出や価値の創出を競う場としてのコンテストです。

コンテストの代表を務める慶應義塾大学大学院・森川富昭准教授の開会挨拶の後、ビジネスパートナーのアクセンチュア・工藤卓哉氏、総務省統計研修所長・須江雅彦様、文部科学省初等中等教育局視学官・長尾篤志様の挨拶が行われました。

発表上の注意事項が説明された後、早速プレゼンテーションが行われました。

全国から50を超える応募の中から予選を通過した10チームが招聘され、発表を行い、審査が行われました。

午後6時半、慶應義塾大学環境情報学部 長・村井純教授の開会挨拶で終了しました。

第2回「データビジネス創造コンテスト」・・・開会挨拶



第2回《デジタルビジネス創造コンテスト》の審査会は11月8日の午後1時半過ぎ、主催者でもある慶應義塾大学三田キャンパスで、コンテストの代表を務める森川富昭准教授の開会挨拶で始まりました。

また今回のコンテストのビジネスパートナーで自治体データを活用するテーマ設定やコンテスト運営面で支援を頂いたアクセントア株式会社の工藤卓哉氏が挨拶を行いました。



続いて総務省統計研修所長で大臣官房・統計情報戦略推進官の須江雅彦様からのご挨拶を頂きました。

ビッグデータの時代はさらに進化し、公共サービスの改善やビジネス・雇用の創出に繋がる公的情報のオープン化に各自治体も取組んでおり、コンテストでは様々なデータを駆使し、新しい発想の政策提案がなされるものと大いに期待するとの主旨のご挨拶がありました。



また文部科学省の初等中等教育局視学官の長尾篤志様からのご挨拶がありました。

先の学習指導要領改訂により統計関連カリキュラムが大幅に強化され、時代に即した教育体系が整備されましたが、統計ではデータをどのような視点で処理するか、取組む際の考え方も大変重要であり、今回のコンテストではそうした発想法も発表されるものと期待するとご挨拶がありました。



第2回《データビジネス創造コンテスト》プレゼンテーション



最優秀賞のシャベル？

デジタル・ネイティブ世代による《自治体政策の変革に資する斬新なアイデア》創造の場を提供することを目的に開催された第2回《データビジネス創造コンテスト（通称：慶應・アクセンチュアDIG）》は慶應義塾大学SFC研究所データビジネス創造・ラボが主催し、今回はアクセンチュア株式会社をビジネスパートナーとなり具体化しました。

近年、行政機関が保有するデータを積極的に民間に開放して、市民生活のさらなる向上につながるサービスの創造や行政における業務効率化を促進させる「オープンデータ」への取り組みが加速しています。

今回の《慶應・アクセンチュアDIG》では、高校生、大学生、大学院生（社会人経験者は除く）を応募資格として、神奈川県、佐賀県、会津若松市（福島県）、鯖江市（福井県）、流山市（千葉県）の2県、3市から提供されるデータや、ソーシャルネットワーク上で展開されているデータなどを掛け合わせて、これら自治体政策の変革に役立つ斬新なアイデアを競い合いました。

これらの自治体からは、若者が定着する街づくりや、年間を通じた観光客の誘致、選挙での若年層の投票率の向上、都市と地方との間における情報格差の解消など、地域のさらなる活性化に向けた自治体ごとの取り組み課題が設定されています。

これら課題を任意に選択し、データ分析によって導き出される結果を踏まえた提案をまとめた50を超えるチームが応募し、事前審査で選ばれた10チームが招聘され、最終選考のプレゼンテーションに臨みました。

第2回「データビジネス創造コンテスト」プレゼンテーション

《流山市若年層投票率向上大作戦》……チームM&A



このチームは私立東海高等学校、私立聖望学園高等学校、仙台市立青陵中等教育学校、宮城県立宮城野高等学校、島根県立隠岐島前高等学校、私立自由の森学園高等学校の皆さんが連携して、流山市の若者層に選挙に関心を持ってもらおう、選挙に出かけてもらおうと「投票率向上」に向けて取組んだ活動でした。それにしてもこんなに離れたところに住む皆さんがどうしてもと思うほど、手作りのユニフォームを着て、見事な連携で、文部科学省の初等中等教育局視学官より「高校生部門賞」を授与されました。

【神奈川県発】ONLY ONE STUDENT-日本の教育改革……Original Japan



2番目に登壇したのは慶應義塾大学の皆さん、神奈川県立中学校のターゲットに「なぜ学校が楽しいのか？」学校の楽しさを分析し「あかさたな派出所政策」を提案しました。

学校を楽しくすることで生徒の「自己実現」を可能にし、潜在力を引き出そうという戦略です。

主催元からの発表のためか、審査委員の先生方からは厳しい質問が飛び出しましたが、徹底したデータの分析力には感心させられました。

質疑応答も的確で、プレゼンテーション力という点でも大変素晴らしい内容でした。

第2回「データビジネス創造コンテスト」プレゼンテーション

《SNSからみる女性が求める「真」のポジティブ・アクションの把握と導入》…実践人社



3 番目は実践女子大学の皆さん、当然、全員女性ですから昨今の安倍政権が目指している「女性の活躍の場」と言ったテーマに関心をお持ちで、テーマは《SNSからみる女性が求める「真」のポジティブ・アクションの把握と導入》でした。

SNS上に飛び交う情報はじめ、厚生労働省や神奈川県労働局のホームページから得た情報を整理し、分析した結果、欧州諸国のデータも示し、生じている男女差の解消には何をすべきかを提言、統計数理研究所副所長の丸山宏先生から「未来創造賞」を授与されました。



《会津若松の魅力は若者に伝わるか?》…Zoke I AWP



4 番目は東京造形大学大学院の皆さんが会津若松の魅力が若者にどのように伝わり、会津若松で展開されている制作活動として会津漆器、田季野ユニフォーム、会津木綿、さざえ堂カーテン、まちなかアートプロジェクトなどを紹介、会津若松を知っているか、会津若松がどのように理解されているか、SASや“Buzz Finder”、ネットや聞き取り調査を実施して分析し、他人事を自分事にするウェブサイトを提案しました。

アクセンチュア賞を審査委員の工藤卓哉氏から授与されました。



第2回「データビジネス創造コンテスト」プレゼンテーション

《オープンデータの分析による救急搬送プロセスの向上》…Team Saggest



5 番目は佐賀大学大学院の皆さんが提供されたオープンデータを分析し、救急対応への提案を行いました。

緊急事態が発生し、電話などで救急車の出動を要請、現場に救急車が到着し、搬送を開始、病院に到着、收容されるまでのプロセスを提供されたオープンデータで分析、#7119の導入による救急車利用を抑制すると同時に、お薬手帳情報の活用により、大きな効果が期待できると提言しました。

見事に最優秀賞を受賞し、村井純審査委員長（慶應義塾大学環境情報学部長）よりピカピカのDIG黄金シャベルを授与されました。



《空き家と学生の空家利活用ニーズのマッチングによる将来の若者拠点形成》…チーム新領域



休憩を挟み東京大学大学院の都市計画、空間情報/情報解析、社会学、建築を学ぶ皆さんの連携チーム新領域です。

鯖江市から提供されたオープンデータを分析し、空き家問題に取り組みました。

人口の減少に伴い今後益々増加する全国の空き家ですが、鯖江市も同様の現象が起きており、若者と空き家の結びつきを考え、空き家をモノづくりの拠点にすることで若者に住んでもらおうと提案しました。

東京大学公共政策大学院の奥村裕一客員教授から優秀賞を授与されました。



第2回「データビジネス創造コンテスト」プレゼンテーション

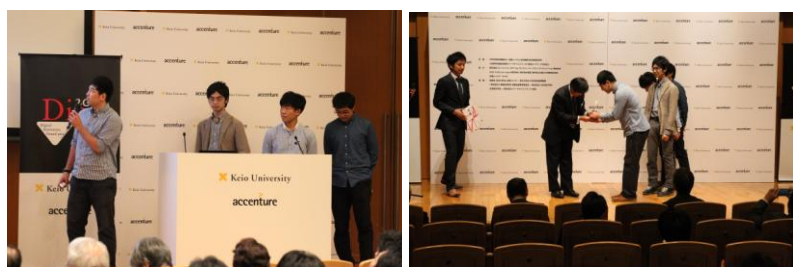
《緊急搬送における時間短縮に向けた救急車等の効率配置》…東大経済研統計コース



7 番目は再び消防庁から提供されているオープンデータを活用して佐賀県内での救急医療サービスの向上を目指して《救急車の最適配置》についてプレゼンテーションを行いました。

通報の位置情報を基に救急車を各消防署に割り振るアルゴリズムを構築し、36 か月分のデータに対して月ごとの最適配置を計算、解析した結果、各月の推定密度と最適配置や季節的な要素などが見えてきました。

ユニークな発想に総務省統計研修所長の須江雅彦所長（大臣官房統計情報戦略推進官）より「審査員特別賞」を授与されました。



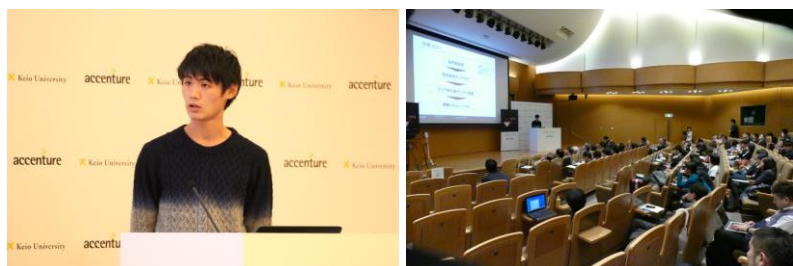
《人の流れシミュレーションに基づいた選挙活動マップ》…トモヒロナウド



8 番目は慶應義塾大学のチーム・トモヒロナウド、4 人チームの代表が発表しました。

効率よく選挙運動を行うにはどこで実施すればよいのか？を考え、流山市の統一地方選挙の投票率向上を目指して、オープンデータを活用して性別・年齢別市民の移動シミュレーションを行ったものです。

その結果、投票場所は比較的合理的な場所にあるが、スーパーマーケットへ向かう移動経路上には設置されていないことから、若者が多く通る経路を可視化し、早朝の選挙活動を実施するなど、改善点が見えてきたようです。



第2回「データビジネス創造コンテスト」プレゼンテーション

《有田焼創業400年に平均年齢19歳が挑む》…Trusteen



9番目の Trusteen チームは慶應義塾大学、京都造形芸術大学、佐賀県立有田工業高等学校の3人が連携した《有田焼400年》を機に焼き物離れに悩む焼き物の町有田を元気にしようという取り組みでした。

FOODCOATを設けて観光客を呼び込み、食事の際に有田焼に触れて頂くことで有田焼の良さを理解して頂く、さらにはネットワークを活用して有田焼を理解してもらえるように WikiARITA を起ち上げようと提案、オープンデータを地域活性化に役立てようという若者からの提案でした。



《流山市における若者の投票率を上げる方法》…数学課題研究チーム



最後のプレゼンテーションは前回の最優秀賞受賞校である長野県屋代高校の数学課題研究チームで、流山市のオープンデータを活用し《若者投票率を上げたい》をテーマに発表を行いました。

流山からのメッセージ「都心から一番近い森の街」、「母になるなら流山市」、「子育てに優しいまち」を若者に理解させ、若者層の投票率を向上させたいと取り組んだものでした。

流山市の現状を分析し、人口は流入していることから子育て世代の関心を高めることが重要と提案しました。



第2回「データビジネス創造コンテスト」…審査員の先生方



審査員の先生方、事前審査を終えて質問したいことがたくさんありそう..



アクセンチュアの工藤先生はビジネスへの展開の可能性について鋭く質問



早速、村井審査委員長がマイクを手して質問...



須江先生も専門家の立場で熱心に質問....

別室での審査委員会の最中の会場では……各地の関係者が



審査委員会が別室で行われている最中、発表会場では、オープンデータを提供した地方自治体から参加した皆さんが、各チームが関心を持ち、取り上げたことへの謝意などを述べたり、行政への協力要請を行っていました



佐賀県から出席した森本C I Oは、皆さんのご提案は全て参考になるのでぜひ佐賀県知事の前でプレゼンテーションをと感想を述べられました。



鯖江市の牧田部長は、多くの皆さんが鯖江市の問題を取り上げたことに感謝し、今後共若い皆さんからのアイデアを提案して欲しいと謝意を述べました。



会津若松市の藤井氏も大変勉強になったと感動の様子でした。



井崎流山市長も参加し、市行政への良い刺激になったと謝意を述べました。

第2回「データビジネス創造コンテスト」…各賞



《審査員特別賞》東京大学・東大経済研究統計コースチーム



《未来創造賞》実践女子大学・実践人社チーム



《アクセントゥア賞》東京造形大学大学院・ZOKEI AWPチーム



《高校生部門賞》
私立東海高等学校、私立聖望学園高等学校、
仙台市立育陵中等教育学校、宮城県立宮城野高等学校、
鳥根県立鹿角高等学校、私立自由の森学園高等学校



《優秀賞》東京大学大学院・チーム新領域



慶應義塾大学SFCデータビジネス創造・ラボ

第2回「データビジネス創造コンテスト」…最優秀賞



シャベルを握り締める村井委員長



僕も欲しいな、このシャベル



《最優秀賞》佐賀大学大学院・TeamSaggest

最優秀賞おめでとうございます……このシャベルでもっともっと深く掘り下げて良いアイデアを出して下さい……このシャベルいいね～。



村井先生との記念撮影



佐賀県という地の利もあっていろいろ分析に熱が入ったのが受賞につながったと感謝の言葉を述べました。

第2回「データビジネス創造コンテスト」・・・記念撮影



開催に先立ち行われた記念撮影では発表者の皆さん、まだ緊張感が漂っています



こちらは表彰式終了後の記念撮影ですが、すでに余裕綽々楽しい撮影になりました。
第2回《データビジネス創造コンテスト》は地方自治体から提供されたオープンデータを活用し、学生の皆さんが発想した素晴らしいアイデアが盛りだくさんでした。

慶應義塾大学SFCデータビジネス創造・ラボ